

今川了俊「道行きぶり」注釈(二)

稲田利徳

この注釈は、前稿「今川了俊『道行きぶり』注釈(一)」(研究集録第八十九号)に続くものである。念のために、凡例を再録しておく。

凡 例

一、本稿は今川了俊の紀行文「道行きぶり」の注釈である。

一、底本には書陵部蔵桂宮本(五〇二―七四)を採用し、次の方針で校訂本文を作成した。

- (1) 漢字・仮名を原則として通行の字体にかえ、新字体のある漢字はそれを用い、濁点、句読点を施した。
- (2) 底本の仮名を漢字に改めた場合、表記を改めた本文の右側に、もとの仮名を記した。漢字の読みを()内に示したものもある。
- (3) 仮名遣いは原本のままとし、送り仮名を補った場合は()内に記入した。また歴史的仮名遣いと一致しない場合は、()を付して歴史的仮名遣いを傍記した。ただし、仮名に漢字を宛てた場合は、これを省略した。
- (4) 反復記号は底本のままとし、踊り字の場合は、もとの仮名に直し、右側に「、」を付した。
- (5) 底本の丁数は省略し、本文も適宜改行した。
- (6) 底本の「道行触上」「中」「下」の区切りは尊重して残したが、他は適当な箇所区切り、番号と内容に即した見出しを付けた。

一、校異・校訂本文は次の原則で作成した。

- (1) 校合伝本としては、松平文庫本(略称―松)、扶桑拾葉集所収本(扶)、中川文庫「桑弧」所収本(中)、群書類従本(群)、内閣文庫本(内)、九州大学本(九)の六本を用いた。鶯宿雑記本は群書類従本の写しなので割愛した。
 - (2) 異同のあるときは、その文字や表記の右肩に番号を付し、校異欄に異同を記した。ただし、意味もない独自異文や明らかな誤字などは校異欄に掲げなかったものもある。
 - (3) 底本の本文を他の伝本で校訂したところは、()でそれを示した。
- 一、「道行きぶり」の地名をもとに、室町時代の山陽道の道筋を考察した。渡辺世祐氏「足利時代の山陽道」(歴史地理 第四巻、第八号・第九号、第十号、明治三十五年八月、九月、十月)は、「道行きぶり」の注釈に際して必見の文献である。本稿でも随時参考にするが、そのつど文献名を記すのは煩瑣なので、これを「渡辺氏」と省略して取り込む。
- 一、今川了俊は、「言塵集」「師説自見集」「歌林」「了俊日記」など、和歌・連歌の用語に解説を加えた歌学書を残している。この注釈でも、「道行きぶり」の用語は、了俊自身の理解に聞くという意図も込め、時々引用することがある。
- 一、書陵部蔵桂宮本「道行触」の翻刻を御許可くださった宮内庁書陵部に対し、厚くお礼を申し上げます。

* * * * *

六 尾道の光景と歌の島

備後になりては、中く名高(き)かたよりも面白き所々ぞ多かりける。入海うちつづきて、磯際遙かに行(き)めぐるに、海人の住処どもの、山もと近きも、げに片便り有りて見ゆ。

足引の山分け下りて、尾道の浦に到り付(き)ぬ。この所のかたちは、北に並びて浅茅深く岩ほ凝りしける山あり。麓にそひて、家々所狭く並びつづ、網干すほどの庭だに少なし。西より東に(入海)遠く見えて、朝夕潮の満干もいとやはりか也。風のきほひにしたがひて、行(き)来る船の帆かげも、いとおもしろく、遙かなる陸奥・筑紫路の船も多くなゆたひるたるに、一夜の浮き寝する君どもの、行きては来ぬる水手の浮びありくも、げに小さき鳥にぞまがふめる。

ただ此(の)向ひたる方に、横おれる鳴山有り。昔、此(の)所を領じける人、和歌の道にすける心深きあまりに、おり立つ田子、入りぬる海人までも、歌をなむよませつづ、もて興

じけるより、やがて、この所を歌の島といふとぞ。塩屋どもかすかにて、焼き立つる煙の末、物あはれなり。此(の)鳴に塩焼くたびに、一日、二日のほどに、かならず雨の降(り)待るといひならはしたり。げにもとおほえき。なをこの南に、はれたる島々あまた見ゆめり。陸奥の塩竈の浦おぼえて、心ある海人も住むべかめり。

よろづに付(け)つづ、心のひまもなく過(ぎ)行(く)うちにも、をのづから心にうかび侍(る)いたづらの藻屑どもかき集め侍る也。

うちははす友寝なりせば草枕旅の海辺もなにか憂(う)からむいまさらに知らぬ命をなげくかな変らぬ世々といひし契りに

中く(に)別れのきははともかくもいはれざりしぞ今は悲しき

〔校異〕①所々―所こそ(松・扶・中・群・内・九)。②ける―けれ(松・扶・中・群・内・九)。③て―ナシ(内・九)。④あさち―あさ海(内・九)。⑤岩ほこり―もほとり(松)。⑥(入海)―底本「今ミ」にみえる。他本により「入海」と訂正。⑦也―なる(内・九)。⑧うかひ―うちかひ(内・九)。⑨くも―と(松)。⑩いふ―いふいふ(松)。⑪やき―場(内・九)。⑫おほえき―覚(内・九)。⑬ある

―は(内・九)。⑭も―ナシ(内・九)。⑮侍―侍り(内・九)。⑯かなしき―哀しき(内・九)。

〔語釈〕○備後―旧国名。吉備国を大化改新後に、前・中・後に分けた一つ。現在の広島県の東部。○名高(き)かた―歌枕や名所旧跡などで著名な所。備後はそういった所ではないが、風光に興味のある所が多いとする。○海人の住処―漁民たちの住居。「海人のすみか」は「ながめかる海土のすみか」と見るからにまづしほたる松が浦島(源氏物語・賢木)にもみえる。○片便り―辞書類は、手紙などを依頼する便宜が片方にだけあって、戻りの機会がないことで「片便宜」に同じとし、「やまがつのあらのをしめてすみそむるかただよりなる恋もするかな」(山家集)を引用する。ただし、この場合は「便り」(消息)とは直接関係はなく、海人の住居が山を背にして、片方を頼みにしている意。その点「はま中に塩かぜばかりおとづれてかただよりなきあまのやどかな」(新撰和歌六帖・信実)の用法に近い。○足引の―山や峰(を)にかかる枕詞。○尾道―広島県尾道市。南は尾道水道に面し、対岸に向島を望む。古くは山陽道の宿駅として栄えた。○浅茅深く―「浅茅」は先述の「印南野」(三章)でも「浅茅枯れわたり」とみえる。丈の低いチガヤのこと。用例「あさぢふかくなりゆくあとをわけいればたもとにぞまづつゆはちりける」(聞書集)。○岩ほ凝りしける山―岩石が凝りかたまっている山。「岩がねのこりしく山」として歌語的表現。例歌「いくしをりこえてか人はいはがねのこりしく山をかへりみるべき」(散木奇歌集)。○所狭く並び―所狭しとたち並んでいるさま。○はやりかた―形容動詞「はやりかなり」は「源氏物語」に十余例みえ、人の口調・性格・所作などの軽々しいさま、速いさまを形容するケースが多いが、ここは潮の満干の速いさまに使用。○風のきほひ―風の激しい勢い。用例「いと、荒ましき風のきほひに、ほろく」と落ちみだる木の葉の露の、散りかかると「源氏物語・橋姫」、
「夜中近くなりて、荒ましき風のきほひに」(源氏物語・総角)。○陸

奥―磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥五か国の古称。○筑紫―九州の古称。また、筑前・筑後をさす。○船も多くとゆたひ―「たゆたふ」は定まる所なく揺れ動く意。例歌「大船のたゆたふ海に碇下し如何にせばかもわが恋止まむ」(万葉集・卷十二)。「いかりおろしたる舟ども、夜もすがらたゆたふさま、心ばそかりき」(鹿苑院殿嚴島詣記)。○浮き寝―ここはかりそめの男女の關係で、宿駅や水辺の遊女の境遇をいう。「いとかう、仮なる浮寝の程を、思い侍るに、たぐひなく思ひ給へ惑はるるなり」(源氏物語・帚木)。○君―遊女のこと。尾道に港町の常として遊女が集っていたことは、「太平記」の「將軍筑紫より御上洛候へば、定テ輛・尾道ノ傾城共、多ク被ニ召具ニ候覽」(卷十六)の記載によっても伺える。○行きては来ぬる―行ったり来たりする意。歌語的表現。例歌「いたづらに行きてはきぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ」(古今集・恋三・読み人しらず)。○水手―普通は船を漕ぐ人。小さな船に乗った遊女が、港の沖に停泊する大船のもとへ行き来するさまは、「法然上人絵伝」などに、その光景が描写されている。ただし、この「水手」は、文表現からみて、了俊自身の「かことは舟こぐ人なり。又ちいさき舟をもかこと云り」(師説自見集上)とてらし、小さい舟の意とみる。古語辞典類には、「水手」に「小さい舟」の意を登載したものは見出されない。○げに小さき鳥にまがふめる―遊女の乗る小舟を海上に浮く小鳥と錯覚する意。「げに」としたのは、「水鳥」の「浮き寝」と絡めたためだろう。○横おれる鳴山―横たわっている島山。山を「よこほれる」とした表現は「かひがねをさやにも見しがけれなくよこほりふせるさやの中山」(古今集・東歌)、「ひんがしのかたに、やまのよこほれるをみて」(土佐日記)など。○領じける人―その地域を治めた人。○おり立つ田子―田で耕作する農夫。歌語的表現。例歌「袖ぬるるこひぎとかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞ憂き」(源氏物語・葵)、「ときぬとおりたつたごのてもたゆくるとるや早苗も今いそぐなり」(玉葉集・夏・源具顯)。○入りぬる

海人―海中に入って漁獲する海人。先の「おり立つ田子」と対称的表現。○歌の島―瀬戸内海に浮かぶ向島の古名。現在向島は尾道市域分と御調郡向島町とに分れるが、島の北東端尾道市向東町に歌の地名が残る。「和名抄」に御調郡の郷名に「歌島」がみえる。「歌の島と云ふ所にて女のうたをうたひてもこのひけるに、明意阿闍梨が船に経よむおとのしけるを聞きてよめる／＼うたのしまのきの下にはおとづれて舟にはのりのこゑぞきこゆる」(散木奇歌集)。○塩屋どもかすかに、焼き立つる煙の末、物あはれなり―「塩屋」は、海水を煮立てて塩を作るための小屋。用例「あはれに、さる塩屋のかたはらに過ぐしつらんことをおぼしの給ふ」(源氏物語・松風)。「かすかに」は、塩屋が数軒あつたことと同時に、「焼き立つる煙」にもかかる。塩焼く煙を「物あはれ」と感じたのは、光源氏が琴を弾じて明石の上と別れを惜しむ「波の声、秋の風には、なほ、ひびき殊なり。塩焼く煙、かすかにたなびきて、とり集めたる、所のさまなり」(源氏物語・明石)などの場面を念頭にするか。○此(の)鳴に塩焼くたびに……―塩を焼くたびに、一、二日のうちに必ず雨が降るとの伝承を、「げにもとおぼえき」と納得したのは、塩焼く煙がやがて雲と化して雨を降らすとの理解によるものだろう。現在も、雨迺いの際、煙を盛んに立てて祈る民俗行事がある。○はれたる島々―見晴らしのきく島々の意。○塩籠の浦―陸奥の歌枕。今の宮城県塩釜市。ただし、今の塩釜港だけでなく、風光明媚な松島湾全体の眺望をも含めていう。尾道港の風光から塩籠の浦を連想したのは、塩屋があつたり、多くの島々が眺望されることによる。○心ある海人も住む―情趣を解する海人が住んでいる意。「おとにきく松がうらしまけふぞ見るむべも心あるあまはすみけり」(後撰集・雑一・素性法師)による。尾道と「心ある海人」の関連は、先の「入りぬる海人までも歌をなむよませつづ」にもよる。○心のひまもなく―心の休まるときもないさま。○いたづらの藻屑―「藻屑」は、海や川などにある藻などのくず。ここは自己の和歌を卑下したものの。

○かき集め―「かき」は「藻屑」を「掻き」と和歌を「書き」を掛ける。○「うちかはす」の歌―「友寝」は「共寝」に同じで、同じ床にいつしよに寝ること。同衾。用例「おきながらあかしつるかなともねせぬかものはげのしもならなくに」(後拾遺集・恋一・和泉式部)。
○「いまさら」の歌―「知らぬ命」は、明日もわからぬ儂い命。用例「はかなくぞしらぬ命をなげきこしわがかねごとのかかりけるよに」(新古今集・恋五・式内親王)。「変わらぬ世々」は、心変りのない夫婦の仲。「いひし契り」は、約束した契り、用例「人ははやいひし契もかはる世にむかしながらの身こそつらけれ」(新後撰集・恋五・尊治親王)。○「中／＼に」の歌―「別れのきは」とは、旅立って別れる際。用例「暁のわかれのきはにしられけりまたとおもはぬ人のけしきは」(玉葉集・恋一・源頼貞)。

【通釈】備後国になつては、有名な所よりもかえつて情趣深い所々が多くあつた。陸地に入り込んだ海が続いていて、その磯の辺をずっと巡つて行つた所に、漁師たちの住居が山もと近くに建っているのも、なるほど、山の片方が頼りになつていふと思われたことだ。

山を分け下つて、尾道の浦に到着した。この所の地形は、北の方に並んで浅茅が深く繁り、岩石が凝り固まつている山がある。その山の麓に沿つて、家々が所狭しと建ち並び、網を干すほどの庭さえも少ない。西から東にかけて内海が遠くまで見えて、朝や夕方の潮の満ち干きも、たいそう速い。激しい風の勢いに従つて、行つたり来たりする船の帆の様子も、とても趣深い。遙か遠くの陸奥・筑紫路の船も多数揺れ動いて停泊している所に、一夜の仮りそめの契りを結ぶ遊女たちの、行つたり来たりする小さな舟が、浮び漂っているのも、まことに小さい鳥に見まがふよつだ。

この真向いの方向に、横たわっている島山がある。その昔、ここを治めた人は、和歌の道に熱中する心が深いあまりに、田におり立つている農夫や海にもぐる漁師にまでも、和歌を詠ませて、悦に入つたこ

とから、そのまま、この所を歌の島と呼んだとかいうことだ。塩焼き小屋が数軒あつて、塩を焼いて立ち上るかすかな煙の末も、なんとなく、しんみりと哀れに見える。この島に塩を焼くたびに、一日、二日の間に、必ず雨が降ると言い伝えている。本当にもつともだと思われ

た。このずつと南の方向に、見晴らしのきく島々がたくさん見えるようだ。そのさまは陸奥の塩竈の浦を彷彿とさせるものがあり、ここには、きつと、情趣を解する海人も住んでいよう。

なにかにつけて、物思いのないときとてなく行き過ぎていくうちに、ひとりで心に浮んできたつたない歌を書き集めました。

恋しい人と袖を交しながらの共寝であつたならば、海辺の旅寝も、なんで憂く辛いことがあるうか。

今更のように、明日とも知らない命を歎くことだ、いつまでも変わることのない仲でいようと約束したために。

別れのせと際に、いとしい人と、あれこれ言葉交わさなかつたことが、今ではかえつて悲しく思われることだ。

〔考〕○この章は、備後尾道の風光を鋭く描写している。岩石の凝り固まつた山の麓、網干すほどの広場もない狭い地に、家が軒を並べて

いるさま、内海の船が多く往き来し、その辺を遊女の乗る小舟が漕ぎ巡るさまは、「新撰朗詠集」(下)の「遊女」の「家來(江河南北岸)」、

心通(上下往来船)の光景を彷彿とさせる。○「歌の島」に興味を催しているのも、和歌に心を寄せる了俊なればこそである。この章には

語釈でも注記したように「源氏物語」の表現や語彙を撰取した描写が目立つ。須磨・明石の巻のほかに、賢木の巻で、藤壺の尼姿と対面したときの光源氏の「ながめかる海士のすみか」と見るからにまづしほたる松が浦島の詠歌の前に「むべも心ある」と忍びやかに、うち誦

し給へる」とある場面も、「あまのすみか」「陸奥の塩竈の浦おぼえて、

心ある海人も住むべかめり」と通う面がある。○後半にある三首の和

歌のうち、後の二首を引用して川添昭二氏は「赴任の折の別れの歌と思われる。あるいは妻との別離を歌つたものかもしれない」(『今川了俊』人物叢書)とする。この三首は「うちかはす友寝」「変らぬ世々といひし契りに」「別れのきははともかくもいはれざりし」といった表現からみて、すべて妻を念頭にしての別離の悲哀を表白したものとみなされる。そこに武士としての勇猛果敢な精神と人間としての恋慕の情への未練の相克をみる思いがする。第四章の「恋の丸」という地名を聞いたとき「かかる所の名を聞き侍るに、まづ思い出る方の侍るかな」も想起される。

七 文なき備後・鯨島のこと

さて備後は鏡にすべき文も少なく、たま(紙魚)の住処より尋(ね)出でたる国(文)も、それをしるべとするほどのこと(わ)はりをさへ知らぬ人のみ侍れば、愚(おろ)か成(る)心にも、欺(あまむ)かれ侍る哉。

壁(かべ)の中(ほこ)の石(いし)の函(はこ)の中に納(おさ)めける世もかばかりやは侍るべき。かなしく覚(おぼ)へ侍るまゝに、うかび侍る歌、

いかにして蓬(よもぎ)の中の蓬(よもぎ)だに麻(あさ)に似たるは少(すく)なかるらむ

つくぐと緑(みどり)の空(そら)にあふがずは世(よ)の憂(うれ)きたびにいかで過(す)ぐさむ

(おひ)生(ま)まがる真木(まろ)の丸木(まるき)の弓取(ゆみとり)はすぐなるよりも力(ちから)こそあれ

乱れたる世には富めるを恥といふこと、げに此(の)比ぞ
ま事とも思ひ知りぬべきや。

五月十九日、備後の尾道より、安芸国沼田といふ所に移り
侍(り)。道は南東に出(で)たる山あり。干瀉を隔てたり。
戌亥に沿ひて磯路遙かに行くに、吉和といふ所あり。ほどな
く夕になりぬ。

日も暮れぬ夕潮遠く流れ葦の吉和が磯に屋戸や借らまし
その海中に、木深き小嶋二(つ)並びたり。これなむ鯨島
といふなり。年毎の師走に鯨といふ魚多く寄り来つつ、又の
年の陸月に又帰り待るとなむ。「これは、ここに居ます神の誓
にてかく侍る」と、海人どもの申(す)なり。それより猶南
に大海に出(づ)る境をば布刈の浦とぞいふなる。

旅衣袖も濡れけり海人乙女布刈の浦の波のたよりに

〔校異〕①すくーナシ(内・九)。②すみかー巢(内・九)。③「つ
くぐ」との歌、内・九の各本では連続して重複。④しりぬーしぬ内・
九。⑤たりーたる(内・九)。⑥二ーナシ(内・九)。⑦くしらーく
しく(内・九)。⑧こ、にーこかに(松)。⑨とーなと(内・九)。⑩
底本「衣」の次に「も」とある。

〔語釈〕○鏡にすべき文―「鏡」はものごとの規範・手本。「文」はこ
こでは書物・文書類。○紙魚の住処―「紙魚」は衣服や書籍などの糊
を好んで食う小虫。「紙魚の住処」は、放置して古くぼろぼろになった

書物の意。「紙魚といふ蟲の住みかになりて、古めきたる微くさきなが
ら、跡は消えず」(源氏物語・橋姫)。○国文―国司から朝廷に提出し
た公文書類。○それをしるべとするほどの……欺かれ侍る哉―この
備後には、「国文」を見てもそれを手引きにできる人もなく、戸惑わさ
れてしまうという、了俊の深い歎息。○壁の中・石の函の中に納めけ
る世―「壁の中の書」は、前漢の武帝の末に、魯の恭王が孔子の講堂
の中から「尚書」「古文孝経」を発見した故事から「古文孝経」または
儒学の書や経書をさす。ここは、災難から避けるために、書物を壁の
中や石造りの箱に納めた世のこと。秦の始皇帝の行なった焚書坑儒な
どの時代を念頭にする。○「いかにして」の歌―「蓬の中の……麻に
似たる」は「荀子」(勸学篇)の「蓬生三麻中、不扶而直」を撰取し
てパロディとする。この「蓬」は書物に暗い人、「麻」を学問に明る
い人に比喻している。なお、蓬と麻の言説は「文選」(卷二十六)にも
「曲蓬何以直、託身依叢麻」とみえ、日本でも、「曲蓬様」麻、不
扶自直」(三教指帰)、「麻中蓬不扶而直」(観心略要集)などはじめ、
多くの文学に撰取されている。例歌「世中に麻はあどなくなりけり
こころのままのよもぎのみして」(新勅撰集・雑一・平泰時)。○「つ
くぐ」との歌―「緑の空」は青く暗れわたった空、蒼天のことだが、
天道の意に使用している。参考歌「わがこころ道たがはずはとばかり
にみどりの空をあふぎてぞふる」(延文百首・権大納言藤原忠季)。「た
び」は「度」と「旅」を掛ける。なお、この歌を詠じたとき、作者の
念頭に、菅原道真の「離れ家三四月、落涙百千行、万事皆如夢、時々
仰三彼蒼」(菅家後集)の詩があったかもしれない。「彼蒼」とは「蒼
天」で天道の意。この詩句は「江談抄」(第四)、「天曆元年託宣記」「正
曆三年託宣記」「神道集」(九)、「北野天神縁起」「撰集抄」などにも引
用されていて著名。○「生まがる」の歌―先の「荀子」のことなども
念頭にするほか、「論語」(為政篇)の「拳直錯三諸枉、則民服、拳
レ枉錯三諸直、則民不レ服」などのパロディか。「丸木の弓取」は丸木

(削らず磨きなどしない伐ったままの木)で造った弓を引く武士の意。ここは物の道理や学問もおさめぬ荒武者の方が、案外、道理をわきまえた正義に合する人よりも勢力があるとす。備後の武士どもを念頭に、皮肉をまじえた述懐。○乱れたる世には富めるを恥ということ―乱世にあつて財を蓄えているのは恥だということ。智もないのに財に富む備後の国人への批判。「げに」といったのは、「論語」(泰伯篇)の「邦有_レ道、貧且賤焉恥也、邦無_レ道、富且貴焉恥也」の見解を念頭にしたため。○安芸国―旧国名。今の広島県の西部、芸州。○沼田―広島県三原市沼田。沼田川の北岸に位置。○戊亥―北西の方角。○吉和―尾道市吉和。吉和川の流域。○「日も暮れぬ」の歌―地名「よしわ(吉和)」の「よし」に「葦・葭」をきかず。「流れ葦」は潮流に流される葦。用例「みつしほにするばをあらふながれあしの君をぞおもふうきみしづみみ」(千載集・恋三・大納言公実)。○鯨島―渡辺氏は「鯨島何れの島か考ふるに由なし。(中略)尤も鯨島は吉和の沖にあれば此島を誤りしにやあらざるか」とするが、『大日本地名辞書』は「岩子島の西に大細島あり、長十余町、其形状鯨魚の波に跳るに似たり、糸崎の東南にあたり、三原布刈の両峡の中間とす。此岩子大細を鯨島と云ひしにや」と推定。『日本歴史地名大系』も「道ゆきぶり」にいう「鯨島」は岩子島(現御調郡向島町)の西の島とする。因みに、了俊の「鹿苑院殿嚴鳴詣記」にも「備前国おの道といふ処の西に、くぢら嶋、いとさき、いくら嶋などいふ浦々北にあたりてみゆ。この所々はいにし比つくしへ下り侍し時通侍しなりけり」と回想している。○年毎の師走に……陸月に又帰り侍る―鯨が毎年、師走(陰曆十二月)にこの島に寄つて来て、翌年の「陸月」(陰曆一月)に帰ること、即ち、鯨がこの島で年越しをすることに興味を喚起している。○布刈の浦―広島県御調郡向島の向島と因島市の因島との間にある瀬戸。この瀬戸は東の備後灘から備讃瀬戸への出入口として重要な位置を占めていた。○「旅衣」の歌―「布刈」は地名と海人乙女が若布を刈るのを掛ける。「波の

たより」は波音が伝える便りの意。用例「いにしへのあとをばつけよ浜千鳥むかしにかへる浪のたよりに」(続拾遺集・雑上・法橋頭尋)。「布刈」に「目離り」(男女の間が疎遠になること)もきかずか。歌意は、旅先にあつて布刈の浦の波の音を故郷からの便りと聞きなし、悲しみの涙で袖を濡らしたこと。

「通釈」それにしても、備後には、手本にできる書物も少なく、まれに紙魚に食ひ荒された古い書物の中から見付け出した国文も、それを手引きにする程度の筋道さえ熟知していない人ばかりがいるので、私のような愚かな心にも戸惑されてしまうことだ。

壁の中や石の函の中に書物を納めたという時代でも、これほどひどい状況であつたとも思えないほどだ。嘆かわしく思うにつけて、心に浮んでまいりました歌、

繁茂する多くの蓬の中に、どうして麻に似て真直ぐなものは少ないのであろうか。(いくら理を知らない人ばかりだといつても、その中に少しは道理をわきまえた人もいていいのに)

心を鎮めて、じっくりと晴れ渡つた青空(天道)をふり仰ぐことがなかつたら、世間の憂く辛いことがある度に、どうして過ごしていかようか。

曲折した真木の原木の弓を執る荒武者は、実直なものよりも勢力があるものだ。

乱れた世には、富を蓄えているのは恥ずべき行為だと言われているが、この頃は、この言葉がほんとうに真実だと痛感したことだ。

五月十九日に、備後の尾道から、安芸国の沼田という所に移りました。その道中には、南東に突き出た山があつた。干潟を隔てている。北西の方向に沿つて、海岸の道をずっと行くと、吉和という所があつた。まもなく夕方になつた。

日も暮れてしまつた。夕潮に遠く流れ行く葦、葭ではないが、この吉和の磯の辺に宿を借りるとしよう。

その海の中に、木が深く繁った小島が二つ並んでいる。これが鯨島というのだそうだ。毎年十二月に鯨という魚がたくさん、(この島のまわりに寄り集まって来て、翌年の正月には再び帰って行くという。「これは、この島に鎮座する神の誓願によって、このようにするので」と、海人達は語っていた。そこからさらに南、大海に出る境界を布刈の浦というのだそうだ。

海人乙女が若布を刈るという布刈の浦に打ち寄せる波の音を、故郷からの便りと聞くにつけ、遠くなった妻を思い出し、私の旅衣の袖も涙で濡れたことだ。

〔考〕○底本には「五月十九日……」の右肩に「応安四」の注記がある。これが俊自身の手になるものであれば、この作品は、彼が応安四年、九州探題として太宰府に赴くときのものであることの確実な証拠となる。○この章の前半は、備後に「鏡にすべき文」のないこと、国文を手引きできる人のいないことなどを深く嘆息している。「荀子」や「論語」などの比喩や意見にも触れながら、かなり辛辣である。了俊は十二、三歳頃から、祖母香雲院から和歌を詠むべきことを諭され(了俊一子伝)、武士として、文武両道に秀でることを庶幾してきた。こういった彼の武士観からすると、書を軽んじて富にのみ汲汲としている備後の国人の姿勢には批判の感情を抑えがたかったのであろう。○五月十九日、備後の尾道より、安芸国沼田といふ所に移り侍(り)。道は南に出でたる山あり」の所は、文脈に即すると、五月十九日は、了俊一行が尾道を出発して、安芸国沼田に到着した日ということになる。川添昭二氏も、今川了俊の略年譜(今川了俊「付載」で、「五月一九日、備後尾道より安芸沼田に移る」とする。この後、沼田を出発したが、八月二十九日と明記されているので、ここに約三か月余りの長い間滞在したことになる。もつとも、この文章は文脈が不安定で「安芸国沼田といふ所に移り侍(る)道は……」と「侍(り)」と切らないで、下に続けることも可能である。その方が、後に続く、吉和・

鯨島・糸崎・因島などが、沼田に到るまでの描写なので自然である。してみると、五月十九日は、沼田に向って尾道を出発した日とも考えられなくはない。一応、問題を提起しておく。○この期間に関連した古文書には、四月十六日に了俊が熊谷直氏に対し、安芸国守護職に任命されたことを告げ、「庶子一族」を同道し、「備後杭庄」に出向いてくるように通達したものの(熊谷家文書)、六月十八日には、都甲三郎四郎が備後国に馳せ来ったのを「神妙」と褒めたものの(豊後都甲文書)などがある。

八 沼田川の夜景・甕天神のこと

北より南にさし出(で)たる山さきには、松や檜原繁りて、
いとおもしろき尾上あり。糸崎とぞいふ。

かづきする海人の手引の糸崎は潮垂れ衣織るにぞ在(り)
ける

向(むか)ひに干潟(ひがた)を隔(へだ)てたる山を因島(いんじま)といふなり。それ行き過ぎ
て備後と安芸国の境(さかひ)を(を)出(づ)る。横(よこ)おれる山中に萱葺(かぶ)ける堂有(だう)り。此(この)の麓(ふもと)まで入海(いりうみ)つづきて、沼田川の流れ
落合(おちあ)ひたり。この河面(がわ)に浮(う)き出(で)侍(ま)るほどに、日暮(ひぐ)れ
はてて、夕闇(ゆふ)の端山(は)の影(かげ)も、いとどたづ／＼しきに、螢(ほたる)かす
かに飛(と)び(び)ちがひつづ、なにとなく物心細(ぼ)きに、この里(さと)へ
松の火などともして来向(きむか)ふ火影(ひかげ)、川波(かみ)にきら／＼と映(うつ)ろひて、

鵜川だつ心地ぞし侍る。

この所は、寿永の昔までは、海の底にて侍(り)けるとて、石のかたはらなどに、牡蠣といふものの殻うち付(き)ためり。離れたる山ども、ここかしこに繁りて、いとおもしろし。

此(の)川に沿ひて、西に年古げなる松山の中に、神の社一(つ)たてり。甕の天神と申(す)となり。これは、かの御神、筑紫へ移され給ひける時、ここにて旅の乾飯まいらせたりける物の具に、甕といふ物の残(り)とどまりて、今の世まで侍(り)けるなるべし。やがて、その甕をも、社に祝(ひ)奉りて、かたはらに置き侍(る)「なり。又、そこにめでたき清水有(り)。これは、かの天神の御手づから掘(り)出(だ)し給(ひ)けると申(す)。

我(が)祈る頼みもことに真清水の浅かるまじき恵みをぞ待つ

〔校異〕①「を」―底本「とて」、扶・中・群・内・九の諸本により校訂。②うき―かき(内・九)。③き―さ(内)。④底本「に」の次に「か」とあり。⑤ふる―ふか(扶中)。⑥ける―けり(九)。⑦「な」―底本「た」、松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。

〔語釈〕○檜原―檜(ひのき)の生い茂っている原。○尾上―を(峰)のうえの約。山の頂。○糸崎―広島県三原市糸崎。和久原川下流域に

位置。神功皇后西行の折、この地で水を献上したことから「井戸崎」と称し、のち「糸崎」に転化したという。○「かづきする」の歌―「かづき」は水中に潜って、貝や海藻などを取ること。「手引の糸」は手で引き出した糸で、地名「糸崎」を導びく。用例「夏びきのてびきのいとをくりかへし事しげくともたえむと思ふな」(古今集・恋四・説人しらず)。「潮垂れ衣」は、潮水に濡れてしずくが垂れる衣。用例「塩垂るあまの衣に異なれや浮きたる浪に濡る我が袖」(源氏物語早蕨)。「すまのあまのしほたれ衣ほしやらでさながらやどる秋のよの月」(続後撰集・秋中・源俊平)。○因島―広島市因島市。芸予諸島の一島で布刈瀬戸を挟んで御調郡向島町の南側に位置。中世には塩の特産地。○横おれる山―第六章既出。○萱葺ける堂―萱(薄・すげ・ちがや)の総称で屋根を葺いた神仏を祭る建物。○沼田川―広島県賀茂郡福富町上竹仁の鷹ノ巢山に源を発し、同郡河内町で入野川・椋梨川・豊田郡本郷町で伝通川、三原市で天井川などと合流して南東流し、瀬戸内海に注ぐ川。○夕闇の端山の影も、いとどたづ／＼しき―「夕闇」は夕方の暗さ。特に、月の出のおそい旧暦二十日前後にいう。「端山」は連山のはしの方にある山、麓の山。「たづ／＼しき」は心細い、寂しい意。この描写は「万葉集」(巻四)の「夕闇は路たづたづし月待ちて行かせわが背子その間にも見む」によるか。○蛍かすかに飛びちがひつつ、なにとなく物心細き―蛍が「飛びちがひ」の表現は、「枕草子」(第一段)に「夏はよる。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる」にみえ、蛍の飛びさまを物心細く眺める場面としては、「源氏物語」(幻)で光源氏が亡き紫の上を偲ぶ「蛍の、いと、多う飛びかふも、『夕殿に蛍とむで』と、例の、ふることも、かかる筋にのみ、口馴れ給へり。よるを知る蛍をみてもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり」などの場面が想起される。○松の火―たいまつ(松明)。○鵜川だつ―「鵜川」は川に鵜を放ち、鮎などの川魚を捕ること。鵜飼い。「だつ」は「くめく」意。用例「宇奈比川 清き瀬ごと

に 鶴川立ち 行きか行くき」(万葉集・卷十七)。○寿永—平安末期、安德・後鳥羽天皇朝の年号。西暦一一八二—一一八四。○牡蠣—イタボガキ科の二枚貝の総称。貝殻は形がやや不規則で、左殻で海中の岩石や杭などに付着する。○甑の天神—広島県豊田郡本郷町下北方炭ヶ岡にある神社。祭神は菅原道真・宇気母智神・速玉男命。道真が太宰府へ赴く途中、この地で使用した甑を里民に与えたので、社を建てこれを納めて、道真を祀ったと伝える。○かの御神—菅原道真(八四五—九〇三)のこと。○筑紫—九州の古称。また筑前・筑後をさす。ここは直接には太宰府。○乾飯—飯(蒸した米)を干したもの。水にひたし柔らかくして食べる。了俊自身らも、「鹿苑院殿嚴島詣記」によると「御旅のかれ飯・みきなどさまぐまいる」「かれ飯・さけなどさまぐまにあり」と食している。○甑—米などを蒸すための器。後の蒸籠。初めはかわら製であったが、後には木製のものもあつた。○めでたき清水—靈験あらたかな泉。「道行きぶり」に言うように、現在も甑天神(甑天満神社)の東麓の街道より少し北へ行つた所に、道真が自ら掘つた井戸という「甑天神靈泉」がある。○「我(が)祈る」の歌—「真清水」の「真」は美称の接頭語。「真清水は、ただ清水也。まことの清水といふ心也」(正徹物語)。用例「なれこそは岩もるあるじみし人のゆくへは知るや宿の真清水」(源氏物語・藤裏葉)。この歌では「ま清水」に「増し」を掛ける。

【通訳】北から南に向かつて差し出た山崎に、松や檜原が繁つていて、たいそう情趣深い峰がある。そこを糸崎という。ここ糸崎の地では、海に潜る海人が手引の糸でもつて、潮垂れ衣を織るのであろう。

(糸崎の) 向い側に干潟を隔ててある山を因島ということだ。そこを通り過ぎて備後と安芸国の境を出る。横たわっている山中に、萱葺きの堂がある。この山の麓まで入海が続いて、沼田川の流れが、そこで合流している。この河面に(舟で)漕ぎ出しているうちに、日もす

っかり暮れてしまい、夕闇の中に麓の山の姿も、いよいよおぼつかなく見えるとき、螢がほんのりと飛びかき、なんとなく心細い気持ちになつてみると、この里に松明などを灯して向つて来ている火の光が、川波にきらきらと映じて、まるで鶴飼を見ているような気がしました。この所は、寿永年間の昔までは、海の底であつたということ。岩石の側面などに、牡蠣という貝の殻が付着しているらしい。ここから離れている山々が、あちらこちらに繁茂した姿をみせ、たいそう情趣がある。

この川に沿つて、西の方向に長年経た松の繁る山の中に、神社が一つ建つていた。名を甑の天神と申すらしい。これは、あの御神(菅原道真公)が、筑紫へ移されなされた時、ここで旅中の乾飯を食べられた道具に、甑という物が残つていて、今の世までであるということらしい。その甑をも神社に祝い奉つて、神体の側に置いてあるという。またそこに、靈験あらたかな泉がある。これは、あの天神(道真公)が、御自身の手で掘り出しなされたものだと言ひ伝えられている。

私が神に祈つて頼みにもすることも多いが、この清水が浅くないように、深い恵みのあることを期待していることだ。

【考】○沼田川に舟を漕ぎ出して夕闇をむかえた所の描写は印象鮮明である。闇の中に幽かに飛びかきう螢を見て、心細い心境になつてゐるのは、「語釈」で注記したように「源氏物語」(幻)、あるいは「伊勢物語」(第四十九段)の、亡き女を思つて男の詠じた「行く螢雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ」などの物語の場面が交錯してゐたろう。それとともに、螢を亡き人の霊と見ることで、戦いを前にした彼自身の心細さも絡めていよう。また、松明の火影が川面に映じたさまを見て、鶴飼を連想しているが、「鹿苑院殿嚴島詣記」には、都を出発する際「桂川のほとりとおぼえて、火の影所々にみゆ。こあゆとるなりけり」と鶴飼を遠望している。○甑天神の由来譚を詳記したのは、単なる物珍しさだけによるものではなからう。九州鎮定のために

都から太宰府に向う了俊の悲愴な心境は、讒言によって太宰府へ流された菅原道真の心情と重なるものがある。天神信仰を背景に詠じた「我（が）祈る」の歌には、そういった了俊の複雑な思いも込められていよう。第二章で「御影の松原」の「北野の宮」が影向した社で、「君がためくらかるまじき心には神も御影をうつさざらめや」と詠じた歌や、第七章の「つくぐ」と緑の空に」の歌で、道真の「万事皆如レ夢、時々仰ニ彼蒼」の詩句を念頭にしていたらうことを思い合せべきであらう。

九 沼田城跡・八幡宮・手向の和歌のこと

此（の）山に並びて、田面の末の道の辺に、片岡のやうなる所に、松や竹など繁くて、草の堂一（つ）たてり。平家の世に、沼田の某とかやが籠りけるを、教経の朝臣の、攻め落としける所と申（す）めり。いまも賤が田返（す）折くは、古き屍など掘り出（す）事も侍るに、矢の穴、刀のあとさえ見え侍（る）となん。

その辺に草とるといひて、田中に人あまたおり立てり。

袖濡らす習ひも悲し菖蒲刈る沼田の田（の）草今日はとりつつ

此（の）南に、よろづの神々祝る奉る中に、男山もいますと申（す）。

頼むぞよここも南の男山おなじ宮居にかけし祈（り）は人の人よりとかやの御言宣は、愚かなる我が身までも、などこかれ侍（る）べき。天翔りてもみそなはし給ふ覽を、如何してか心をもみがきて、照し給（ふ）らむ御心にも叶（ひ）侍（ら）まし。

七月七日手向に、梶の葉に書く歌七首、

紅葉ばの錦の橋や渡すらむ棚機つ女のまれに逢瀬に

西の海や我こそ頼め織女の今日渡る瀬のさはりなければ

我が祈る心の末もとを（ら）なむ今日の手向の文字の関

守

今日よりやなを頼ままし筑紫舟梶の七葉の神にまかせて

時来ぬとはや待ち渡せ彦星の五百機織れる糸の島人

あひみまく星にやいとど祈らまし秋は花咲く菊の高浜

契りありて秋はかならず七夕の松浦の川を渡るべきかな

筑紫の名所を少々よみ入（れ）侍るなり。

〔校異〕①ける―たる（内・九）。②田中―田の中（内・九）。③ある―ある（九）。④ひと―内本は「ひと」の右に「国か」と傍記。⑤侍―侍り（内・九）。⑥に―底本は「に」の右に「の力」と傍記。群本は「の」。⑦に―は（内・九）。⑧〔ら〕―底本「こ」とあり。右に「さか」と傍記。松・扶・中・群の諸本により「ら」と校訂。内・九

の各本は「り」。⑨舟—女(内)。⑩はやまらわたせ—侍こそ渡せ(内・九)。

〔語釈〕○此(の)山—前出の「西に年古げなる松山」をさす。○片岡—一方が切り立っている岡。また孤立した岡。○草の堂—草葺きの御堂。この後の「沼田の某とかや籠りける……」から判断すると、高木山城(沼田城)の跡に建っていた御堂と思われる。高木山城跡は、茅ノ市の北側に連なる丘陵の西端、比高十数メートルの舌状部を削平し構築、現在の豊田郡本郷町下北方にある。○平家の世—平氏が天下を治めていた世。○沼田の某—「平家物語」(覚一本)では、沼田次郎、「平家物語」(延慶本)では、奴田太郎。○教経の朝臣の、攻め落とすける所—「教経」は能登寺平教経(一一六〇—一一八五)。父は平清盛の弟教盛、母は藤原資憲の女。平教経が沼田城に籠る沼田次郎を攻め落としたことは、「平家物語」(巻九、六ヶ度軍)に「能登守讃岐の八嶋へ渡り給ふと聞えしかば、河野四郎通信、安芸国住人沼田次郎は母方の伯父なりければ、ひとつにならんとて、安芸国へをしわたる。能登守是をきき、やがて讃岐八嶋をいでておはれけるが、すでに備後国鞆嶋にかか(ツ)て、次日、沼田城へよせ給ふ。沼田次郎・河野四郎ひとつにな(ツ)てふせきたたかふ。能登殿やがて押寄責給へば、一日一夜ふせきたたかひ、沼田次郎かなはじと思ひけん。甲をぬいで降人にまいる」(日本古典文学大系本)とみえる。○いまも賤が田返す……矢の穴、刀のあと—農夫が田を鋤き返していると、矢の穴や刀の傷跡のある骸骨が発見されることをいう。昔の激戦のさまを生しく知らしめる事実。○「袖濡らす」の歌—「菖蒲」はショウブの古称。「菖蒲刈る」は、地名「沼田」を導く序詞的に使用。参考歌「あやめかる沼のいり江になく蛙をしみがほなるこゑにも有るかな」(正治初度百首・三宮惟明親王)。「袖」と「菖蒲」(綾目)は縁語。沼地に下りて田の草をとりながら、辛苦の涙と田の水で袖を濡らす農夫に同情する歌。○男山—普通は、京都府の南部、八幡市にある山、その山頂にある石清

水八幡宮をさす。ここは沼田城跡の南方にある男山の八幡宮。なお、石井進氏は、この八幡宮は現存する弁海八幡宮のことではないかとする(『中世武士団』)。安芸国沼田庄における八幡信仰に関しては、松山宏氏「守護城下町の研究」(第一章第三節)に触れてある。○「頼むぞよ」の歌—「こも南の男山」とは、京都の石清水八幡宮も都の南にあり、この八幡宮も南にある意。「おなじ官居にかけし祈(り)」によると、了俊は、九州へ出発するに際し、京都の石清水八幡宮に対し、戦勝祈願を行なっていたことがわかる。○人の人よりとかやの御言宣—八幡神は応神天皇を主座とし、弓矢の神として尊崇されたが、とりわけ源氏が氏神として強く崇めた。「人の人より」の御託宣は、「縁事抄託宣」「八幡大菩薩御託宣」「八幡宇佐宮御託宣集」などにみえる、天平勝宝七年の託宣「自二人之國一ハ吾國、自二人之人一ハ吾人云々」(八幡大菩薩御託宣)をさす。この御託宣は「八幡愚童訓」にも引用されるほか、「新葉集」「李花集」「とはすがたり」などをはじめ、中世文学にも散見される。ここは、今川了俊が「源氏」姓であるため、先の御託宣により、源氏の守神として八幡神をとらえ、他の氏子よりも「愚かなる我が身にも、なかもれ侍(る)べき」と御加護を期待したもの。○天翔りて—神や人の霊が天上を走り飛ぶ意。先の託宣の「若吾民之中一人有愁嘆事一者、吾去社住虚空一テ天下発三種々災一矣」などを念頭にするか。○みそはなし—「見行はず」で「見る」の敬語。○七月七日—七夕祭の日。五節句の一つ。陰暦七月七日の夜、牽牛星と織女星とが天の川を渡って逢うという中国の伝説から二星を祭り、子女の技芸の上達などを祈る祭り。○手向—神仏への供物。ここは七夕に七首の和歌を奉ったこと。○梶の葉に書く歌七首—七夕に、芋の葉の露を硯に受けて墨をすり、梶の木の葉に歌を書いて星に手向ける風習があった。「七月七日かぢのはにかきつけはべりける、あまのがはとわたるふねのかぢのはにおもふことをもかきつくるかな」(後拾遺集・秋上・上総乳母)。「いつよりか梶の七葉のことはをかきて手向けしほ

しあひの空」(永享百首・性脩)。○「紅葉ばの」の歌―「棚機つ女」が稀の逢瀬のために、紅葉の錦の橋を渡すのかと想像した歌。織女星は機を織るので、紅葉を錦に比喻する発想を重ねている。参考歌「天河紅葉をはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ」(古今集・秋上・読人しらす)。「あまの河あき瀬ふむ間に深けぬとや紅葉のはしをわたし初めけん」(後鳥羽院御集)。○「西の海や」の歌―「西の海」は西の方の海、また西海道をさす。七夕が七月七日に天の河を無事に渡れるのであれば、自分達一行も、それにあやかつて、西の海を支障なく渡ることを頼みにしたいとの意。○「我が祈る」の歌―「心の末もとを(ら)なむ」とは、本来の祈願通りになつてほしい意。用例「夏草の事しげき世にみだされてころのすゑはみちもとほらず」(風雅集・雑上・伏見院)。「今日の手向の文字」とは、七夕に奉つた七首の和歌をさし、「文字」は地名「門司」を掛けて「門司の関守」と連鎖。「文字」と「門司」を掛けた参考歌「こひすてふもじのせきもりいくたびかわれかきつらん心づくしに」(金葉集・恋上・藤原顕輔)。「門司の関」は、筑紫の歌枕。豊前国、今の福岡県北九州市門司区、関門海峡の早瀬の瀬戸にあつた関所。「とをらなむ」と「関」は縁語。○「今日よりや」の歌―「筑紫舟」は筑紫地方(九州)へ航海する船。ここは了俊一行の軍船団をさす。「梶の七葉の神」は七夕の星。「梶」に舟の「楫」を掛ける。用例「たなばたのとわたる船のかぢのはいく秋かきつ露の玉づき」(新古今集・秋上・俊成)。七夕に「梶の七葉」を奉つて祈願した今日からは、筑紫に向う舟楫を七夕の神に任せて、いっそう頼りにしたいの意。底本には、この歌の上に「諏訪大明神は織女一舩と申」と注記がある。このことは後にも出てくるが、要するに、軍の神である諏訪大明神と七夕の織女が同体なる伝承を根拠に、織女星に祈願することは戦勝に通ずるとの真意のあることを示すのであろう。○「時来ぬと」の歌―「彦星」は牽牛星のこと。「五百機」は数多くの機。用例「織女の五百機立てて織る布の秋さり衣誰か取り見む」(万葉集・

卷十)。「たなばたの五百機衣おりしもあれなとかは秋を契りそめけん」(続後拾遺集・秋上・院御製)。「糸の島人」は糸島(福岡県糸島郡)の人。「五百機」「糸」「わたす」は縁語。「はや待ち渡せ」とは、糸島の人に向つて、早く我々を筑紫に渡して欲しい気持ち、七夕が七月七日を待つて、天川を渡ることと絡めての発想。用例「待ちわたる月日をおほく過しきて逢瀬ほどなき天の川なみ」(久安百首・上西門院兵衛)。○「あひままく」の歌―「星」は牽牛星・織女星で、「あひままくほし」と掛ける。同じ修辭の歌「あひままく星はかずなく有りながら人に月なみ迷ひこそすれ」(古今集・雑体・紀有朋)。「菊の高浜」は、福岡県北九州市小倉北区の小倉湾に臨んだ長浜があり、その西が高浜。「秋は花さく菊」と掛ける。「豊国の企救の高浜高高に君待つ夜らはさ夜ふけにけり」(万葉集・卷十二)。星から「菊の高浜」を出したのは、「久方の雲のうへにて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける」(古今集・秋下・藤原敏行)など、菊を星に見立てる伝統による。類歌「これよりやあまのかはせにつづくらんほしかとみゆるきくのたかま」(夫木抄・法印公誉)。○「契りありて」の歌―「松浦の川」の松浦地方は、現在の佐賀県・長崎県の広い地域にわたるが、唐津の虹の松原の東端浜崎から東南に玉島川の流れがあり、昔はこれを「松浦川」と呼んだ。「松」に「待つ」を掛ける。七夕は、以前からの約束通り、秋には必ず天川を渡ることによせ、自分達一行も、秋には必ず松浦川を渡りたい思いを吐露したもの。○筑紫の名所―門司・糸島・菊の高浜・松浦川などをさす。

【通釈】この山(甕天神のある)に並び、田面の遠くの方の道の側に、片岡のような所があり、そこに松や竹などが繁茂し、一軒の草葺きの堂が建っていた。平家の時代に、沼田の某とかいうものが、ここに籠城していたのを、平教経朝臣が攻撃をしかけて落城させた所ということだ。今でも農夫が田畑の土を掘り返す折々には、古い屍を掘り出すこともありますが、(その死体に)矢の穴や刀の傷跡さえ見えるという

ことです。

その辺に草を取るといって、田の中に大勢の人が下り立っている。菖蒲を刈るといふ沼ではないが、ここ沼田の田の草を今日取りながら、その袖を辛苦の涙と水とにびっしり濡らす生活も哀れに思うことだ。

この南の方向に、さまざまな神々を祝い奉っている所があり、その中に男山（八幡神）もいらつしやるということだ。

ここでも南の方向に男山が鎮座しているが、それと同じ、都の南の男山である石清水八幡宮に誓願したことの成就を頼みにすることだ。（八幡神の）他の人よりも源氏の氏子を加護するとの御託宣は、愚かである私の身にも、どうして洩れることがあろうか。神は天上を飛びかけても、我々の行末を御覧になっていらつしやるので、なんとか自分の心を錬磨し、私どもを照らしなされる御心にもかないたいものです。

七月七日の七夕祭の日、神に供えるため、梶の葉に書いた歌が、以下下の七首。

天上では、棚機つ女が稀の逢瀬のために、紅葉の葉で造った錦の橋を渡すのであろうか。

今日（七月七日）、七夕が渡って行く川瀬に、なんの支障もないならば、それにあやかかって、私も西の海へ無事に行くことを頼みにしよう。

今日、神に供える文字（七首の和歌）によって、私が祈っている本来の願いの通りになって欲しいものだ。

筑紫へ航海する我々の船の楫を、七夕の神におまかせして、今日からは無事に航海できることを、これまで以上に頼みにしたい。

今こそ時節到来だと、私を待って、めざす所に早く渡しておくれ、彦星の多くの機を織るといふ糸島の人よ。

秋に花咲く菊、その菊の高浜を秋には見たいものと、七夕にいよ

いよ祈願しよう。

前々からの約束の通り、秋には必ず天の川を渡るといふ七夕にあやかり、この秋には、我々を待っている松浦の川を必ず渡るつもりであるよ。

（これらの歌に）筑紫の名所を少しばかり詠み入れました。

〔考〕○平教経の沼田城攻撃のさまは、〔語釈〕に覚一本「平家物語」を引用しておいたが、この場面は延慶本「平家物語」（第五末、能登守四国者共討平事）や「源平盛衰記」（巻二十六、能登守所々高名事）などにもみえる。各々に若干の相違があるので、要所を以下に引用しておく。「能登守はさぬきの屋島御所に着給けり、通信此事を聞て安芸の奴田太郎も源氏に心さし有よく聞てければ、奴田太郎と一に成て奴田尻へ渡りて、今日備後の笠嶋と云所に留る。次日菫嶋を出て奴田城へ着にけり、平家やかて追かゝりて一日一夜戦けるほとに、矢種射つくしたりければ、奴田太郎甲をぬき弓をはつして降人に参にけり」（延慶本）。「能登守は讃岐国屋島御崎にぞ著給ふ。河野四郎此事をき、安芸国奴田太郎は源氏に志あり、一に成て軍せんと思ひて奴田尻へ渡りけるが、今日は備後の菫嶋に懸て、翌日は菫嶋を漕出て奴田尻に著。能登守是を聞、奴田城に推寄て一日一夜責戦。奴田太郎矢種射尽て、叶じと思ひけん、鎧を脱弓を外して降人に参けり」（源平盛衰記）。○「人の人より」の御託宣を念頭に、八幡宮に戦勝祈願の詠歌を奉っているが、「道行きぶり」には、源氏の氏神としての八幡神への尊崇が濃厚であり、これ以降にも、しばしば関連記事が出てくる。○七月七日に七首の和歌を七夕に手向けているが、これ以前に認められた、丁後の書状を紹介しておく。まず、六月二十五日には、阿蘇惟村宛に、「御同心之由承候之間、愚息義範に豊後・豊前の兵を副えて先発させたと報じ（阿蘇文書）、七月一日には、田原氏能宛に、九州鎮定のために「合力」ただければ大へんに喜悦である旨の書状（三浦文書）を、各々認めている。○七夕の手向の歌に、糸島の人に「はや待ち渡せ」

とか、秋には必ず「松浦の川」を渡ろうと詠じている背景には、筑前国糸島郡、佐賀県東松浦の地域からみて、武士団である上松浦党とのことが念頭にあったと思われる。事実、了俊は前もって弟頼泰(仲秋)を肥前に派遣し、松浦党対策を講じさせている。川添昭二氏が「了俊は安芸沼田におり、七夕の節句に七首の歌を詠み、筑紫の名所を少々詠み込んだと言っているが、松浦と呼応しつつ、豊前から入って筑前を攻撃するという計画が、詠歌の間におのずからにじみ出ている」(『今川了俊』)と解説された通りと思う。なお、今川了俊と松浦党との関連に関しては村井章介氏「今川了俊と上松浦一揆」(日本歴史、第三三八号、昭和五十一年七月)、川添昭二氏「九州探題今川了俊と松浦党」(松浦党研究、第六号、昭和五十八年六月)などに詳しい。

(未完)

(平成四年四月十日受理)